

編者・牟田都子さんによる 『贈り物の本』著者紹介

贈り物をめぐる記憶を持ち寄って編んだ
アンソロジー『贈り物の本』。
本書に寄稿してくださった37人の書き手について、
牟田都子さんが紹介します。



『動くとき、動くもの』(講談社、2002年)は
忘れがたい一冊。この『オーライ ウー
リ ひなた猫』(春陽堂書店)は、三軒茶屋
の猫本専門店キャッツミャウブックスで
サイン本を手に入れることができ、
大事にしています。

文筆家の
青木奈緒さん



『ほんのちょっと当事者』『元氣じゃない
けど、悪くない』(共にミスマ社)や最新作
の『相談するってむずかしい』(細川貂々
さんとの共著、集英社)を、私は「自分」を
掘り下げていくノンフィクションとして
読みました。

編集・ライターの
青山ゆみこさん



Twitterを始めた2011年当時、この場所
に浅生さんがいてくださったことで、私
は個人的にとっても助けられました。最
新刊の『選ばない仕事選び』(ちくまプリマ
ー新書)における「仕事」の定義は、子ど
もも大人も必読。

作家の
浅生鴨さん



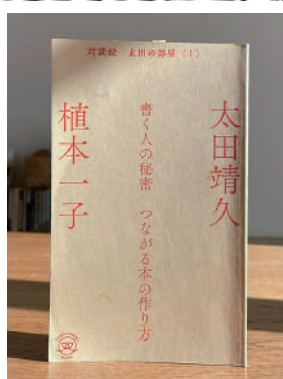
安達さんの著作や活動は、『私の生活
改善運動』(三輪舎)のように自身に潜っ
ていく面と、『とりあえず話そう、お悩み
相談の森』(エムディエヌコーポレーション)の
ように他者に開かれた面とが共存して
いる、そこに惹かれます。

作家の
安達茉莉子さん



『舞台のかすみが晴れるころ』(ちいさいミ
シマ社)は、能について、舞台について
という以上に「ことば」についての随筆
集であると私は読みました。「みんなの
ミシマガジン」の連載「舞台の上でみる
夢は」もぜひ。

能楽師ヲキ方高安流の
有松遼一さん



自主制作と商業出版を行き来しながら
書き続けてきた植本さんの『書く人の秘
密 つながる本の作り方』(太田靖久さん
との共著、双子のライオン堂出版部)は個人で
本を作る人必携の一冊だと思います。

写真家の
植本一子さん



文学や言葉の「力」というものがあるとして
について語ってくださいと求められたなら、
私はこの本を差し出すと思います。
『痛いところから見えるもの』(文藝春秋)

文学紹介者の
頭木弘樹さん



辞書編纂者の飯間浩明さんとタッグを
組んだ『日本語どんぶらこ』は毎日小学
生新聞の連載。小学生で金井さんの絵
がそばにあるなんて、うらやましい!
『ことばは変わるよどこまでも』(毎日新聞
出版)

文筆家・イラストレーターの
金井真紀さん



第35回Bunkamuraドゥマゴ賞を受賞した『ロツコク・キッチン』(写真一之瀬ちひろ、講談社)は、同名のドキュメンタリー映画が2026年2月に公開予定。待ち遠しい限りです。

ノンフィクション作家の
川内有緒さん



ときどき「何の本かわからないけれどとにかく読んだほうがよさそうだ」と胸がざわざわする本に出会いますが、『わたしを空腹にしないほうがいい』はその一例です。『日記の練習』(NHK出版)は装幀(佐々木暁)に驚嘆した一冊。

作家の
くどうれいんさん



日記を書くとは世界をよく見る練習で、書けるようになったら書き続けるしかないということを私は古賀さんはじめ日記の書き手から学びました。古賀及子『私は私に私が日記をつけていることを秘密にしている』(晶文社)

エッセイストの
古賀及子さん



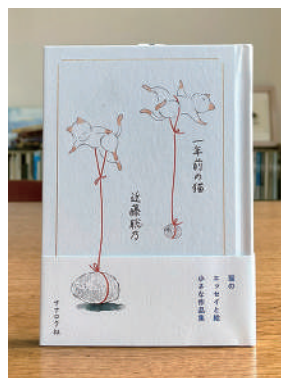
9年越しの書き下ろし小説『けんちゃん』が扶桑社から2026年1月に刊行予定とのことで、待ち切れない気持ちを、各所への寄稿を読んでなだめています。「せつかく病気になったので」『絶不調にもほどがある!』(BREWBOOKS)

作家、エッセイストの
こだまさん



ASIAN KUNG-FU GENERATIONのギター・ボーカルであり、『朝からロック』『青い星、此处で僕らは何をしようか』など多数の著作を持つ書き手でもあります。私は『INU COMMUNICATION』(ぴあ)のような作品もこっそり最真にしております。

ミュージシャンの
後藤正文さん



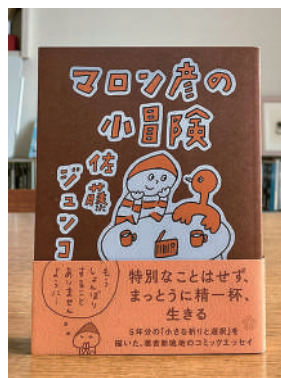
周囲にも『ニューヨークで考え中』の愛読者多数。個人的には『不思議というには地味な話』がグラシン紙で巻かれていた頃から、近藤さんの文章のファンでした。
近藤聡乃『一年前の猫』(ナナロク社)

マンガ家、アーティストの
近藤聡乃さん



私が初めて斎藤さんのお仕事に接した『ギリシャ語の時間』(ハン・ガン、晶文社、2017年)の刊行時を思い出すと、いまの書店の韓国文学の棚には隔世の感があります。斎藤真理子『「なむ」の来歴』(イースト・プレス)

韓国語翻訳者の
斎藤真理子さん



わが家にはジュンコさん(ご本を読むと、ついこう呼びたくなってしまう)の小さな小さな絵がいくつかあります。欲張りですが、見るたび増やしちゃうから。
佐藤ジュンコ『マロン彦の小冒険』(ちいさいミシマ社)

イラストレーターの
佐藤ジュンコさん



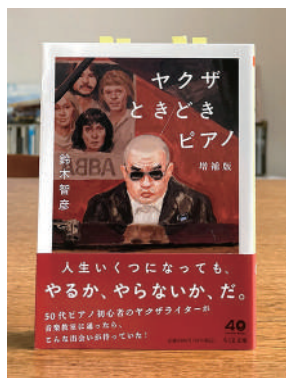
『国語辞典を食べ歩く』など辞書に関するご著書や番組でもおなじみですが、この一冊はもっと読まれていいと思っています。『これやこの サンキュータツオ随筆集』(角川文庫)

漫才師「米粒写経」、
東北芸術工科大学准教授の
サンキュータツオさん



白川さんの言葉はいつも身体を通して出てきたたしかな実感に根を張っていて、自分もこんなふうになりたいものだと思わび思います。
白川密成『マイ遍路 札所住職が歩いた四国八十八ヶ所』(新潮新書)

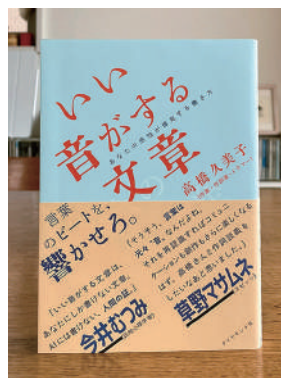
愛媛県、栄福寺(真言宗)住職の
白川密成さん



略歴やご著書について私があればこれ語るより、この本を読んでいただくのが一番だと思います（すでにお読みになった方なら賛同してくださいますよね）。願・映画化。

鈴木智彦『ヤクザときどきピアノ 増補版』（ちくま文庫）

フリーライターの
鈴木智彦さん



高橋さんが主催されたイベントで、参加者全員でささやかな贈り物交換をしたこと、この本を作りながら何度も思い出していました。

高橋久美子『いい音ができる文章 あなたの感性が爆発する書き方』（ダイヤモンド社）

作家・作詞家・農家の
高橋久美子さん



武田さんの言葉を読むと「よく言ってくださった」という気持ちになると同時に、そうして溜飲を下げているだけではないのだろうなという気持ちにもなります。

武田砂鉄『「いきり」の構造』（朝日新聞出版）

ライターの
武田砂鉄さん



武埴麻衣子さんが作家活動を始められたのは2023年、それよりも前に日記ZINEで私は武埴さんの言葉と出会っていたのだとは、この本を作っている最中にわかったことでした。2026年は新著が3冊(!) 刊行予定。

武埴麻衣子『酒場の君』（書肆侃侃房）

作家の
武埴麻衣子さん



田尻さんの最初のご著書である『猫はしっぽでしゃべる』の装画は、紙版画作家の坂本千明さんによるもの。お店に飾られている原画を見に、また熊本を訪ねたいです。

田尻久子『猫はしっぽでしゃべる』（ナナログ社）

橙書店 オレンジ店主の
田尻久子さん



辻山良雄さんが東京・荻窪に新刊書店「Title」を開いて、来年で10年になるんですね。『しぶとい十人の本屋』に登場する本屋の中で、私がまだ行ったことのないのは3つ。いつかと思っていなくて行かなければ。

辻山良雄『しぶとい十人の本屋』（朝日出版社）

本屋Title店主の
辻山良雄さん



web連載「コアラ日記」のファンで、名久井さんの文章をもっと読みたいと思っていました。名久井さんのデザインがどのように生まれるかは、下記の本をぜひ。

『現代日本のブックデザイン史 1996-2020』（誠文堂新光社）

ブックデザイナーの
名久井直子さん



書籍の装画も多数手がけておられますが、先日東京で開催された個展で見た立体作品も忘れがたいものでした。

『イラストレーション』No.245（特集くらはしれい、西淑、Naffy 玄光社）

イラストレーター、画家の
西淑さん



本を作るとは、編集者や著者のみならず、デザイナー、印刷所、製本所、物流、そして書店との協働なのだと、私は日野さんから教わりました。

日野剛広『本屋なんか好きじゃなかった』（十七時退勤社）

ときわ書房志津ステーションビル店店長の
日野剛広さん



タイムトラベル同人誌『超個人的時間旅行』にお誘いいただいたとき、きわめて有能な編集者としてのお顔も知ることになりました。

藤岡みなみ『ぼちぼち』（nolulu）

文筆家、ラジオパーソナリティ、ドキュメンタリー映画プロデューサーの
藤岡みなみさん



『言葉なんていない?』の初回印刷分に封入されている「あいだ新聞」には、今回書いていただいたエッセイの前日譚のようなお話が載っています。
古田徹也『言葉なんていない? 私と世界のあいだ』(創元社)

哲学者の
古田徹也さん



初の歌集を作るにあたり、「未踏の地には一〇〇〇本ノック」の心構えでのぞんだと書かれていて、尊敬の念を新たにしました。
美村里江『たん・たんか・たん 美村里江歌集』(青土社)

俳優・エッセイストの
美村里江さん



2020年刊行の『兄の終い』が『兄を持ち運べるサイズに』のタイトルで映画化され、いよいよ公開ですね。いつか村井さんの訳した翻訳書を持ち寄って一押しをプレゼンし合う読書会がしたい。
村井理子『兄の終い』(CEMH文庫)

翻訳家の
村井理子さん



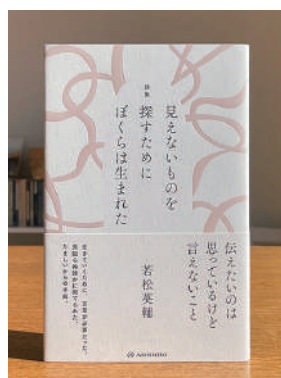
本の奥付やカバーに載っている「著者プロフィール」は多くの場合定型ですが、山崎さんのそれは折にふれ更新されていて、新著が出るたび読むのが楽しみです。
山崎ナオコーラ『魔法のつららペン つららペンと氷の国』(静山社)

作家の
山崎ナオコーラさん



2017年に徳島県立文学書道館で開催された「吉村萬壺 意味のない美しい夢」展を見に徳島を訪れた思い出はいつも鮮明です。吉村作品の中で私が偏愛している小説は『虚ろまんていっく』。
吉村萬壺『うっぼのひとりごと』(亜紀書房)

小説家の
吉村萬壺さん



詩人としての顔もお持ちです。私が初めて若松さんの言葉に接したのは『悲しみの秘義』(ナナロク社、のち文春文庫)でした。10年前のことです。
若松英輔『見えないものを探るためにぼくらは生まれた』(亜紀書房)

批評家、随筆家の
若松英輔さん



地元福島の新報で15年以上エッセイの連載を続けておられ、『エッセイ三昧』(田畑書店)という著書も。個人的には10年ほど前に和合さんの朗読を聴く機会を得て以来、詩のとらえ方が変わりました。
和合亮一『LIFE』(青土社)

詩人の
和合亮一さん



長年雑誌を読むうちいつしか名前を記憶していたライターの方が何人かいるのですが、渡辺さんはどんな記事を書かれていたかまで鮮明に思い出せます。
文・渡辺尚子、写真・高見知香『東京、あこがれの和菓子店』(淡交社)

編集者、ライターの
渡辺尚子さん



うれしさ、心温まる記憶、懐かしい風景、かすかな痛み、複雑な思い。37人が大切な記憶を持ち寄る、書き下ろしエッセイ集。
牟田都子 編『贈り物の本』(亜紀書房)

校正者の
牟田都子さん

ご紹介した本は、
お近くの書店、ネット書店でお求めください。



株式会社 亜紀書房
〒101-0051 千代田区神田神保町1-32
TEL: 03-5280-0261 Mail: info@akishobo.com